

## 第4章

復旧・復興・創生に

ご尽力いただいた皆

さんからのお言葉

— 寄稿文 —





衆議院議員、前内閣総理大臣

安倍 晋三さん

## 東日本大震災復興記憶集に寄せて

かけがえのない多くの命が失われ、未曾有の被害をもたらした東日本大震災の発生から10年の歳月が流れました。最愛のご家族やご親族、ご友人を失われた方々のお気持ちを思うと今なお哀惜の念に堪えません。改めて衷心より哀悼の意をささげます。また被災された全ての方々に、心からお見舞い申し上げます。

発災から15日後、私は世耕議員と共に彼の友人の運送会社のトラックにありったけの物資を詰め込み、被災地へと向かいました。

国会議員は政策を作り、実行することが仕事です。しかしあの時は居ても立っても居られなかった。これはあの時の日本人の多くが共有した思いではなかったでしょうか。

「今日はわざわざありがとうございます。昨日、女房の葬儀を終えたところなんだ。でも、挫けちゃいけない。頑張るよ。安倍さん達も頼むよ。」

そう言って笑顔でもって私達を新地町の避難所で迎えてくれた漁業者の方の言葉を忘れることは出来ません。

発災から1年9ヶ月後の2012年12月、私達は政権を奪還し第二次安倍政権が誕生しました。「東北の復興は私達の使命である。」この信念のもと「閣僚全員が復興大臣である。」とのスローガンを掲げ、行政の縦割りを排除し、現場主義を徹底し、復興の加速化に取り組みました。

地震、津波被災地域では、災害公営住宅の整備や高台移転による宅地造成は昨年12月に完了しました。また、JR常磐線は昨年3月に全線開通し、BRT（\*）復旧を含めれば東日本大震災により被災した鉄道は全線開通しました。

復興道路、復興支援道路は全事業の8割が開通し、住まいの再建、まちづくり、交通インフラは概ね完了する中「総仕上げ」の段階に入っています。

原子力災害被災地域についても昨年3月までに帰還困難区域を除く全ての地域での避難指示が解除されるなど、復興再生が本格的に始まっています。

被災地の皆様の復興に向けた熱意と数多くの困難を乗り越えた皆様の粘り強い努力の成果です。改めて心より敬意を表します。

福島の復興の為には風評被害の払拭が必須です。市民の皆様にご協力頂き、太平洋島サミットをいわき市で2回開催し、島興国の首脳達がいわき市に集い福島の食材に舌鼓を打ちました。被災地の農水産物に輸入規制を行っている54カ国の首脳達に直接働きかけ、15カ国まで減らしましたが、当然ゼロとしなければなりません。

まだまだ課題は多く、様々な困難と向き合っておられる方々も沢山おられると思います。これからも使命感を持ち皆様と共に復興に力を尽くして参ります。

\*BRT（バス高速輸送システム）＝気仙沼線と大船渡線の津波被害にあった箇所は、鉄道ではなくバスを運行して乗客を運ぶという選択肢をとった。



衆議院議員、元復興大臣

吉野 正芳さん

## 発災から10年を迎えて

東日本大震災の発災から10年が経過しました。改めて、大震災によってお亡くなりになった方々のご遺族の皆様方に謹んで哀悼の意を表し、すべての被災された方々に心からのお見舞いを申し上げます。発災時には長期間にわたり地元消防団員をはじめ自衛隊、警察、消防、海上保安庁の皆さんの救援活動や医療関係者、国・地方自治体からの応援とボランティアの方々のご支援を私たちは決して忘れませんし、忘れることはできません。心から感謝申し上げる次第でございます。

私はかつて復興大臣に就き525日間その任にありましたが、在職当時からすべての被災地の状況を把握し復興の足掛かりを掴めるよう尽力いたしました。ふるさといわき市では、地震と津波のみならず原子力発電所の事故によって過去に経験したことの無い過酷な状況にありましたが、津波被害地域においては整備が進み住まいの再建が進展しているように、この10年、復興・創生の歩を進めてまいりました。発災後も大規模な自然災害が頻繁に起こっています。とりわけ令和元年には台風19号とそれに引き続いての大雨被害に見舞われましたが、私たちは一人ひとりが防災意識の向上に努める必要性を痛切に感じました。

福島県は農業県であり、また、いわき市は「潮目の海」と称される豊かな常磐沖が眼前に広がり、漁業と関連の水産加工業を営む方々が多くいらっしゃいます。然しながら、水産物の扱い量は震災前とは比較にならないほど低下しております。漁業が通常の操業に戻ったあとは風評被害を乗り越え、国内のみならず海外各国の理解醸成に努め、再び「常磐もの」としての評価を市場で再認識していただけるものと確信いたしております。

わが国はじめ世界各国で猛威をふるう新型コロナウイルスは国民生活に多大の悪影響を及ぼしておりますが、効果的な医薬品の開発が実現しない限り、私たちは日常生活の中で自らを律しながら基本的な対策を講ずることこそが感染拡大を防ぐ最善の方法だと思います。

令和3年度から第2期復興・創生期間に入ります。未来にける可能性は無限にあります。互いに支え合いお互いの境遇に身を置き、絆を確かめながら全力を傾注してふるさといわきを甦よみがえらせましょう。



▲豊間地区・復興さくらの会第2回記念植樹祭に参加



▲豊間地区の海岸線



参議院議員、前法務大臣

森 まさこさん

## ～大震災を忘れず 未来へつなぐ～

東日本大震災と原発事故から10年。あらためて犠牲者のご冥福をお祈りし、被災者の皆様にお見舞いを申し上げます。

3.11当日私は国会で決算委員会の審議中でした。すぐにはいわき市の事務所と両親に電話をかけましたが繋がらず、報道で様子を推測するしかなく居ても立っても居られない思いでした。電車も止まり高速道路も通行止め。国道6号線が混雑で動かず国道4号線経由で夜中に到着。12日に原発が爆発し、私は夫が運転する車でマスコミも入ってこない原発近くギリギリのところまでいきました。2回目の爆発が起きましたが避難物資を届け続けました。3月14日に私が撮影した映像は全国ニュースで放送され今でもYouTubeに載っています。当時のいわき市長、県議市議の皆様や青年会議

所、商工会議所、医師会、薬剤師会、農協、漁業組合など多くの皆様から悲惨な声が続々と届きました。野党でしたので国の中枢にダイレクトに届けることができず<sup>しくじ</sup>たる思いでした。水やガソリン不足、線引きの不公平、一律損害賠償から外された観光業界等、金融庁勤務時代の人脈を使って各省へ要請を続け、防災服のまま国会を往復し窮状を訴え救済と支援を求めました。私は「原子力被害者早期救済法」や「二重払い救済法」など、多くの議員立法を起案しました。

そして、当時の政府の対応が遅かった事を批判するだけでなく、自分が災害のプロになり国に新しい提案をしていかなければならないと勉強し、自然災害やテロ防護の国際危機管理士の資格を日本人初として取得しました。現在も世界100か国1万人の仲間と共に訓練しています。浜通りに複合災害の訓練センターを設置すれば経済発展の新境地にもなると菅総理に提案しました。現在まで、いわき市民の皆様、多くの皆様のおかげで復旧復興が実現されてきました。国の「福島イノベーション・コースト構想」をはじめとした復興政策も継続させます。そして「いわきバッテリーバレー構想」は、菅総理が2050カーボンニュートラルを宣言し、水素産業に関する技術開発など世界中で脱炭素社会ビジネスの争いが激化する中、まさに時代の先端です。浜通りに世界規模の水素工場、いわき市に東北随一の水素ステーションもあります。

また、コロナ禍で地方への回帰の動きがあります。以前から若者と女性の流出が問題となっていますが、女性や若者が就職で、家庭を持って子育てや教育ができるためにも、いわき市で実施されている日本版ネウボラ制度は私が少子化大臣時代にフィンランドから導入した制度で、効果が期待されます。

原発事故から歯を食いしばって復興してきた我々のふるさと。ここで育つ子供たちがいわき市に誇りを持って、生涯安心して安全に、豊かに暮らしている地域となるために、私は生涯をかけて参ります。



▲ 4/12 新橋で行われた、いわき復興支援イベントにて



▲ 5/8 いわき市久之浜町



公益社団法人いわき市  
シルバー人材センター理事長、  
前いわき市長  
**渡辺 敬夫さん**

## 市民の笑顔を求めて

3月11日、市内の中学校の卒業式に出席した後、地震が発生した。市役所本庁舎が被害を受けていたため、県の合同庁舎駐車場に部長達を集めて対応を協議、災害対策本部を耐震構造になっていた消防本部に設置することにした。津波が到達したとの報告を受け、いち早く避難所を開設し、支援物資を届けなければと動いた。JAに直接電話し、炊き出しするためのコメの提供を依頼、市職員・JAで手分けして避難所におにぎりを配布したことが最初の災害対応だった。

以後、厳しい局面が続く中、多くの決断に迫られた。12日、当時の檜葉町長から「檜葉町民1,000人をいわき市に避難させてほしい」と電話があり、原発が原因であると分かった。いわき市でも独自の判断で原発から30km圏内にある久之浜・大久地区の自主避難を決定し、バスを手配、消防団員や区長さんを通じて避難を呼びかけ、13日、地区住民に自主避難を要請した。幸いに、実現には至らなかったが、この判断と同時に、40~60km圏内の避難についても避難計画を策定するよう市職員に指示していた。30万人以上の市民を避難させるにはバスでは足りない、小名浜港に自衛隊や民間の船舶を集め、県外の港へ避難するしかないと思った。安定ヨウ素剤の配布も然り、15日には消防本部に設置していた放射線量の測定機器が高い放射線量を観測し、配布の準備を急いだ。ガソリン不足も深刻だった。小名浜石油のタンクから市民へ供給してもらえるよう、親会社である三菱商事の専務に電話し、協力を取り付けた。県内で最初にガソリン不足が解消できたのはいわき市だった。

「地震」「津波」「原発」「風評」の四重苦の中で、一日も早く被災された方々の生活再建への道筋をつける必要があった。避難所に物資を円滑に届け、がれきの撤去などの復旧作業や行方不明者の捜索を行うため、第一に道路の確保に取り組んだ。また、仮設住宅対策にも早急に取り組み、借り上げ住宅を確保するなど、全力で災害対応、復旧・復興に向けて取り組んだ。思い返してみても、当時、心身が休まる時はなかった。一方で、震災から一年が経ち、市内も徐々に落ち着いてきたころ、市民の笑顔が見られたことが市長として何より安心し、ほっとした。市民の笑顔を見て、ここから一年一年、いわき市は復旧・復興に向けて少しずつ歩んでいくのだと思った。

震災の検証をしていく中で、江戸時代にもいわき市に津波の被害があったことが分かった。「地震、津波が起こったら高いところへ逃げる」という震災の教訓を後世に伝え、震災を決して忘れないための教育、震災からこれまでの出来事を次世代へ継承していくことが非常に重要であると考えている。

結びに、この震災によりお亡くなりになられた方々に、改めて哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。



▲ H23.4.11 災害対策本部において黙とう



▲ H23.4.24 久之浜町を視察



元いわき市議会議員 議長  
蛭田 克さん

## 大震災で受け止めたこと、 そして今後に託したいこと

### 1. はじめに

早いもので、もう10年が過ぎ去った。当時私は、市議会議長に就任して間もない時期で、山積する様々な課題に使命感を持って取り組んでいた。そんな時、空前の複合災害が襲ってきた。多くの人命が奪われ、町中が破壊され、あらゆる機能がストップした。今まで経験したことの無い光景が広がり、不安と絶望とが交錯する中で、私は、これから何が起きようと議員として悔いのないように取り組んでいこう、と決意を新たにした。

記憶集に寄稿文を寄せるに当たり、大震災で受け止めたことや今後に託したいことについて述べていきたいと思う。

### 2. 大震災で受け止めたこと

未曾有の災害であったこともあり、人それぞれの「受け止め」があったように思える。立場や環境によっても違いがあったであろう。どの「受け止め」も貴重であり、後世に伝えていかなければならないことだと思う。私は、「絆」や「寄り添う」ということについて考えさせられることが多くあった。本市は、国内外そして様々な関係の方々から復旧・復興に向けて最大級の支援を頂いた。私は、東北や全国の議長会役員をしていた関係上、各地で本市や県の復旧・復興の支援を呼び掛けていた。そんな中で被災3県の災害瓦礫の処理を全国の自治体で手伝うという提案があった。しかしその処理は、岩手と宮城に関してのことであり、福島は除外された。受け入れ自治体側の放射能に対する住民感情が大きな問題であったようだ。そのことを理解はするが、最も困難な地域が受け入れられなかったことも事実なのである。「風評被害」には今もなお悩まされている。科学的根拠によらない無責任な全国的な言動により、我々は苦しめられている。「絆」や「寄り添う」という言葉が、時にはむなしく、空虚な響きをもって私に伝わってきた。困難や悲しみの状況の中では、人は溢れんばかりの優しさで接してくれる一方で、残念ながら、冷徹なまでに非情な対応もできるのである。人間社会の持つ多面性・不条理性を痛感させられた。

### 3. 今後に託したいこと

変わり果てた故郷に立って、私は、「国破れて山河在り」の唐詩を思い浮かべていた。10年を経過して、故郷は見事によみがえってきている。これは、これまでの市長はじめ関係者及び市民の皆様のご尽力の賜物であり、心から感謝したい。私は、2点、今後に託したいことがある。一つは、人材育成を強力に推進してほしいということだ。大災害から故郷を守る事が出来るのは、究極的には優秀な人材・市民なのである。「人材に勝る防災なし」、を肝に銘じてほしい。二つは、全ての原発は廃止し、再生可能エネルギーに転換することである。悲劇を繰り返してはならない。私は、多くの犠牲者の鎮魂のためにも、このことを後世に伝えていきたいと思う。



▲福島県議会議長へ要望



▲市災害対策本部において市長へ要望



前秋田県由利本荘市長  
**長谷部 誠さん**

## 東日本大震災から10年に寄せて

東北地方に大きな爪痕を残した東日本大震災の発災から、令和3年3月11日で10年を迎えました。あらためて震災によって犠牲となられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族や被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

昭和61年にいわき市と旧岩城町との間に結ばれた「親子都市」の盟約は、平成17年の市町村合併により由利本荘市が誕生して約15年を経た現在においても、しっかりと受け継がれており、親密な相互交流が続いていることに感謝申し上げます。

震災時、本市においては、最大震度5弱を記録したものの、幸いにも人命や建物に大きな被害はありませんでした。本市では、すぐにでも甚大な被害に遭われないいわき市の復旧・復興に少しでもお力添えできないかと考え、震災発生直後の3月13日を皮切りに、救援物資を数回にわたりお送りし、また職員の派遣や被災者の受け入れなど、微力ながら支援をさせていただきました。

震災発生から約1ヶ月後の4月18日、いわき市を訪れた際に、鈴木英司元副市長より被災地をご案内いただき、筆舌に尽くしがたい惨状を目の当たりにしました。地震、そして津波の恐ろしさをまざまざと実感させられたことを、今でもはっきりと記憶しております。

こうした経験を通して、災害時の助け合いの必要性を強く感じ、平成25年1月に、いわき市、宮崎県延岡市との3市による「親子・兄弟都市災害時応援協定」を締結し、従前より深めてきた絆が、より一層強固なものとなり、大変心強く感じております。本市でも、未曾有の災害を経験したいわき市から多くの教訓を学び、災害対策の一層の強化に努め、安全・安心のまちづくりを進めてまいりました。

10年の歳月を経て、被災地において復興は着実に進み、活気を取り戻してきているようにも見受けられますが、被災者の心のケアや原発事故による風評被害など、未だ多くの課題が残されていることと思います。一日も早い復旧と真の復興が成され、いわき市と由利本荘市の末永い友好関係の継続のもと、両市がさらに発展していくことを心より祈念いたします。



▲いわき市災害対策本部を訪問



▲親子・兄弟都市災害時応援協定書調印式



大正大学副学長、  
大正大学地域構想研究所副所長、  
前宮崎県延岡市長  
**首藤 正治さん**

## 兄弟都市・延岡市として

あれは3月議会の最中のことでした。議場から出るとテレビに人だかりがしています。私は阪神淡路大震災の現場にも発災直後に赴いた経験がありますので巨大地震のもたらす凄惨さは知っているつもりでしたが、津波が街や田畑を飲み込んでいくさまがあまりにも生々しく映し出されるのを目の当たりにして、中継映像の鮮明さゆえに逆に非現実感がつるような異様な感覚に囚われたのを覚えています。

江戸時代に内藤公が磐城平藩から延岡藩へと転封になったことが縁起で、延岡市はいわき市と兄弟都市の盟約を交わしていましたから、この震災は他人事ではありません。いわば遠くの親戚を襲った災厄と感じました。

発災直後は電話もつながらずやきもきしましたが、3日後にようやく副市長と直接話ができ、一番困っているものをお聞きしたところ飲み水だの

のこと。直ちにペットボトルの水を手配し翌日には10トン車に満載して送り出しました。以前に飲料水メーカーと災害時供給協定を結んでいたことが迅速な確保につながったと思います。輸送にあたってくれた業者さんも、通常の輸送ルートが使えない大混乱の中、刻々と変わる道路情報を各方面からかき集めて、日本海側に大きく迂回するルートをなんとか見つけ出し無事に届けてくれました。

その後、全国で支援体制が作られていく際に、宮崎県内では市町村ごとに支援先の割り振りがあったのですが、延岡市はいわき市と兄弟都市だからということで特別にいわき市中心の活動にさせてもらいました。

そして支援活動に派遣した職員が帰ってくるごとに直接報告を受けていたところ、彼らは異口同音に「いわき市民の皆さんに逆に励まされましたし、とても勉強になりました」と言うのです。

例えば、罹災証明業務で家屋の調査に行くと、絶望の淵にあるはずの被災者の方から意外にも感謝の言葉。あるいは、延岡市の給水車で業務にあっていた職員が宿舎近くの定食屋さんで食事をとっていたところ、他のお客さんや店の方から同様に感謝や労いの言葉をいただいた。こんなエピソードに、みんな感動していました。

支援するつもりが逆に励まされ、教えられるという展開。あの時、延岡市は確かに支援する側ではあったわけですが、むしろ同じ日本人として一緒に困難に立ち向かっているという意識になれたのだと思います。

のちに、いわき市・由利本荘市・延岡市の3市間であらためて「親子・兄弟都市災害時応援協定」を結んだように、東日本大震災はこうしたお互いの縁を大切にしたい都市間連携の重要性を実感させられる契機にもなりました。



▲いわき市内を巡回する延岡市の給水車



▲親子・兄弟都市災害時応援協定の調印式



東京都港区長  
武井 雅昭さん

## 東日本大震災から10年を迎えて

東日本大震災という未曾有の災害から、10年を迎えました。いわき市のみなさんにおかれましては、今もなお、復興に向けてご努力を続けておられることと思います。被災された全ての方々に、心からお見舞い申し上げます。

いわき市と港区は、平成6年7月、区内のニュー新橋ビル内にいわき市のアンテナショップが開設されたことをきっかけに交流が始まりました。平成20年8月には、いわき市、いわき観光まちづくりビューロー、港区、ニュー新橋ビル商店連合会の4者間で「商店街友好都市との交流に関する基本協定」を締結し、商店街振興・観光振興の促進はもとより、災害時の相互応援・協力を含めた幅広い交流を行ってまいりました。

港区は、東日本大震災の直後から、いわき市との交流をもとに区民から寄せられた救援物資をいち早く送るとともに、職員を派遣するなどの支援を行ってまいりました。

震災をきっかけとして、平成25年4月には、災害時の応急対策及び復旧対策等の相互協用に特化した「災害時相互協力協定書」をいわき市と締結しています。

また、震災後には復興支援をきっかけに新たな交流も始まりました。区内のNPOが主体となり、いわき市をはじめ福島県と港区の学生同士が文化体験、意見交換をする交流事業「ふくしまみなと未来塾」や、いわき市の新鮮な農産物が手に入る「いわきマルシェ」など、区民がいわき市について知り、交流できる機会も増えています。令和2年度からはいわき市と港区の相互の職員交流が実現し、震災を経て、より一層いわき市との絆が深まっています。

いわき市の皆さんには、これまで港区から派遣された職員をあたたかく迎え入れていただき、区職員はいわき市民やいわき市職員の方々の復興にかける熱意を実際に感じながら、ともに汗を流すことで、多くのことを学ぶことができました。いわき市での業務に携わる中での貴重な経験は、災害時の応急対策業務や、帰宅困難者支援、津波発生時の避難所確保、情報発信強化、様々な区内事業者との災害時協定など、港区における防災対策の強化に活かされています。

災害時の応急対応や、復旧・復興対策において、迅速かつ効率的な対応を図るためには、自治体間の連携・協力関係をより一層強めていくことが重要だと感じています。

港区は今後とも、区民とともに、いわき市とさらに交流を深めることで、相互の発展と防災対策の強化につなげて参ります。

結びに、皆様のご健勝といわき市の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。



▲災害時相互協力協定書締結式



前山口県宇部市長  
久保田 后子さん

## 「石炭のまち」つながりの支援と交流

東日本大震災から10年。多くの犠牲者に心から哀悼の意を表し、これまで復旧・復興にご尽力されてこられた皆様に敬意を表します。

いわき市と山口県宇部市の間には、「石炭のまち」という共通点がきっかけでした。震災の2か月ほど前、常磐炭田史研究会の方々が来訪され、ともに石炭業を礎にまちが発展してきたことから、両市間の市民交流を始めようとしていたのです。

このご縁から、宇部市はいわき市の復興支援を行うこととし、経済界・自治会・市議会と行政とが連携して「東日本大震災復興支援宇部市民協働会議」を立ち上げ、そのプロジェクトチーム「復興支援うべ」が、発災直後の物資支援や市職員の派遣、生産者支援のためのマルシェを開催するな

ど、両市で幅広い活動を行ってきました。

市民ボランティアの派遣においては、2011年4月にバスにより、35名の支援をいわき市にお届けしました。

さらに、積極的に進めたのが両市の子供たちを通じた交流です。原発事故の影響で以前のように外遊びができないという状況を伺い、2011年から全4回、「子ども夏休み夢プロジェクト」を開催しました。山、海、湖、都市公園など自然豊かな宇部で夏を思いっきり楽しんでもらおうという企画です。市民ボランティアのサポートや航空会社のご協力も得られ、毎年約30名の小学生と教員の皆様をお迎えし、市民間の交流が深まる機会となりました。海水浴や花火大会で歓声を上げる子供たちの姿が今も懐かしく思い出されます。

また、宇部の中高生がいわき市を訪れ、現場を自分の目で見て学び、学校や地域で報告するという取組も継続的に実施してきました。被災者の方々と直接対話することで、復興の道のりの厳しさや支え合いの大切さを実感するなど、これからの社会を担う世代に貴重な体験をさせていただき、感謝しております。

こうした活動の積み重ねにより、地理的距離を超えていわき市をより身近に感じる市民が増えていくことを実感しました。私自身もいわき市を訪問し、市民の皆様のまちへの想いに感銘を受けた一人です。

いわき市と宇部市は2014年1月に「災害時相互応援協定」を締結し、文字どおり、災害時に互いに助け合うパートナーとなっています。現在、いわき市では被災の経験や教訓などを次世代へとつなぐ取組が行われており、それらが今後の災害に強いまちづくりにも活かされていくことでしょう。

3.11を機に本格化した両市間の交流ですが、今後の新たな展開にも期待するとともに、いわき市のさらなる復興、創生、発展を心から祈念しております。



▲ときわ公園の彫刻「ありの城」を鑑賞するいわき市の子供たち（2014年夏）



前新潟県新潟市長  
篠田 昭さん

## —日本海側の「防災・救援首都」を目指して—

10年前の3月11日、日本海側の新潟市も大きな揺れに見舞われました。その後、市長室のテレビには大津波が東北太平洋側を襲い、街並みを次々と呑み込んでいく恐ろしい光景が映し出されました。「歴史的な大災害だ！」と直感して、4時過ぎには仙台市へ先遣隊を出すよう指示しました。新潟ではこの頃、2004年の中越大地震、2007年の中越沖地震と災害が相次ぎ、新潟市は支援する側に回って救援・復旧のノウハウが蓄積されていました。先遣隊は発災から10時間で仙台市役所に到着。後に奥山市長（当時）から「先遣隊長の助言は具体的で、闇夜の航海に羅針盤を手にした思いでした」と感謝されました。

一方では福島第一原発の過酷事故が発生し、何万人の方が新潟県に避難してきました。新潟市へはマイカー避難者がほとんどで、新潟県庁と協力して放射線量のスクリーニングを行いつつ、市立体育館をはじめ大型体育施設を次々と避難所にして受け入れました。丁度、新潟市に中国総領事館が開設された直後で、中国は被災地在住の自国民を新潟空港から避難させることとし、大型バスで数千人が一気にやってきました。日本人被災者と合わせると大変な数となり、避難所がパンクしないか心配でしたが、新潟空港では通常見ることのない大型機が次々と中国から到着。数日で自国民を脱出させました。その後、南相馬市や浪江町の首長さんが新潟市の避難所を訪れ、「新潟の避難所は配慮が行き届いている」と感謝されましたが、これも新潟では市民・NPO・企業も含め救援・防災力がついていたせいかもしれません。

発災から1カ月半ほどすると、被災地への支援物資の大半が新潟港や日本海側の鉄道・道路を經由して被災地へ運ばれていることが分かり、データを集め国交省に報告しました。その結果、「日本海軸」の重要性が国に認められ、新潟—山形県境で途切れていた日本海東北自動車道がミッシングリンク（\*）解消に動き出しました。一方では、いわき市の清水市長の呼び掛けで磐越道の早期4車線化を求めるシンポを開催いただき、私も出席しました。動いている中で、新潟市には首都直下型や南海トラフなどの大災害が起きた際、「最大の救援拠点となるミッションがある」ことに気づき、「防災・救援首都」を掲げることにしました。これを機能させるには、「日本海軸」と並んで日本海側と太平洋側を結ぶ「横断軸」が重要であり、磐越道の役割は従来想定以上に大きいものになります。日本海側が被害を受けた時にも2つの軸が最大の救援ルートとなるので、今後も日本列島の安全度を上げるために、いわき市と新潟市との協働が欠かせません。よろしくお願いします。

\*ミッシングリンク＝未整備区間で、途中で途切れている区間のこと。



▲ H27.9.24 危機発生時における相互応援に関する協定締結式



秋田県由利本荘市  
市民生活部生活環境課

高山 淳一さん

## 復興支援といわき市からの教示

その日、理不尽極まりない試練がこの国を覆い、我が由利本荘市と親子都市の盟約を結ぶいわき市にも甚大な被害が及んだ。都市交流事業の職務を通じ多くの方々にお世話になり、強く思い入れのあるいわき市の被災。何か出来ないか、何かしなければとの焦燥感の中で日々を過ごしていた。

程なく由利本荘市はいわき市への職員派遣を決定。名乗り出た12名で2班編成が生まれ、自分も第1班として赴くこととなった。当地ではまだ余震が頻発しており、また大きな地震が発生する恐れもある。ほんの少しだけ、死を意識した。

4月18日、いわき市に向け出発。岩手県の半ばを過ぎると舗装の破損が目立ち始め、進むほどに悪化する。段差も激しくなり、地震の激しさをい

よいよ実感し始める。

その頃の東北自動車道は災害救援の関係者のみ利用を許されており、当然ながらサービスエリアは全店舗閉鎖、トイレだけ利用できる状態だった。そこにいるのは自衛隊員とDMAT（災害派遣医療チーム）、我々のような自治体職員のみ。普段の楽し気な雰囲気はなく、音楽も歓声もない異様ともいえる空間は強く印象に残っている。

我々は、日本中から集まった大勢の自治体職員と共に家屋の被害状況を調査する業務に携わった。破損した建物、崩れた塀、陥没した道路、そして市民の方々から伺う痛ましいお話には掛ける言葉も無かったが、逆に「頑張る」と励まされ、その度に胸が痛んだ。

ある夜、宿舎だった平競輪場に市からの差し入れとして、御礼のメッセージを添えたイチゴが届けられた。我々は、その厚情に感激しながら、心の底から感心した。極限ともいえる厳しい状況の中で、ここまでの気遣い。我々にとっては驚嘆に値することであったが、思い見るに行政組織にとって欠かすべからざる配慮であり、いかなる状況でも全方位に気を配るべきとの教示であると受けとめた。

果たして我が由利本荘市に同じことができるかとの自問と共に、一人の行政職員として見習わなければと肝に銘じた次第である。

あれから10年。とても困難な復興の道のりであったらうし、それぞれの心には消せない傷もあるだろう。

それでも、地域の再生に向けて前を向き、力を尽くしてきた全てのいわき市民に心から敬意を表し、いわきの空のもとに限りない幸福が舞い降りることを切に願っている。



宮崎県延岡市上下水道局業務課

戸高 祐樹さん

## ふるさと 第二の故郷

震災が起こった当時、私は市民課の窓口で、住民票の会計を行っていました。

市民用のテレビモニターに、地震発生の速報が流れ、その後、建物、瓦礫が混ざった黒い津波の映像が映り、そのフロアにいた市民、職員、全員がただただ呆然と眺め、その場が静まり返っていたのを覚えています。

それから、直接現地へ行き、少しでも被災された方達の役に立ちたいと思うようになり、被災地への復興支援に手を挙げました。

そして半年程経った2011年の10月に二週間、兄弟都市である、いわきに派遣されることとなり、建築士の方と、罹災証明に係る再判定業務を行いました。

また、2016年にも、一年間、資産税課の家屋係でお世話になりました。

2011年に伺った当時は、震災から半年は経過していましたが、地震や津波の被害の爪痕が、まだ生々しく残っており、校庭に溢れんばかりに積まれた瓦礫、岩間の津波に流された防潮堤、ほとんどの家屋の屋根にかかったブルーシート、正直見たこともない状況、景色でただただ言葉を失うばかりでした。

二度の復興支援業務は、決して楽なものではありませんでした。しかし、自分達も被災者でありながら、いわきの復興を担う職員の方達の重圧や、負担に比べれば、大したことはないと思えました。また職員の方や、建築士の方、調査先の市民の方、皆さんからとても親切にいただいたお陰で、約一年間業務をこなすことができました。本当にありがとうございました。こうして復興支援に携わったことで、大規模災害が起きた際の自治体職員としての心構えを学ばせていただきました。本当にここまで諦めず、復興のために尽くしてきた皆さんには、頭が下がる思いです。

まだまだ復興の半ばではあると思いますが、この十年間、一先ず本当にお疲れ様でした。

また、実は2011年に伺った際に、今の妻と知り合い、お盆や、正月には、ほぼ毎年、妻の実家に帰省しています。その度にいわきの良さを知ることができ、今では私にとって、第二の故郷となっています。

いわきは本当に魅力的で、食べ物はどれも本当に美味しく、いわき市海竜の里センター、いわき市石炭・化石館「ほるる」、スパリゾートハワイアンズ、いわき・ら・ら・ミュウ、アクアマリンふくしまなども、いつも子供達と楽しく利用させてもらっています。

またじゃんがら念仏踊りや、いわきおどりも大好きで、特にいわきおどりは、あんなに若い世代にも親しまれていて、とても素晴らしく、他の自治体職員としても羨ましく思います。

昨年は新型コロナウイルスの影響で帰省できませんでしたが、早くこの状況が落ち着き、家族みんなでいわきに帰省できることを、心から楽しみにしています。



東京都港区高輪地区総合支所  
まちづくり課

小酒 広也さん

## 震災復興・側溝堆積物撤去事業に携わって

私は、平成29年度にいわき市に派遣職員として、震災復興事業に携わりました。東日本大震災が発生した時期は就職活動をしており、震災後の平成24年に港区役所に入区し、いわき市派遣となるまで被災地に行くことがありませんでした。それまでに報道等で知った被災地の状況や復興支援に従事した先輩方の話を聞き、微力でも役に立てることがあればという思いから派遣を希望しました。

平成29年当時、私が担当した事業は、震災復興・側溝堆積物撤去事業というものです。平成29年当時は震災から6年が経過していたことから、大規模なハード面の整備は概ね完了していましたが、道路の側溝等、細かい部分の復興が完了していない状況でした。側溝堆積物撤去事業とは、震災

後6年が経過し、市民総ぐるみ運動による側溝清掃を中止していたことで堆積した側溝の土砂等を撤去するものでした。

撤去にあたっては、<sup>あらかじめ</sup>予めヒアリングした住民要望を基に進めるため、工事等を発注して現場を監理する業務と比較して、様々な方面の地元住民の方々と密に接することが多く、地元業者とも何度も打合せ等を実施したため、業者も含めて地元のいろいろな方々とコミュニケーションをとることができました。路線ごとに撤去を進めていたため、一つの路線の堆積物撤去が完了するごとに住民の方々から感謝の言葉をいただくことができました。

いわき市の職場の方々からは、派遣された4月からとても温かく迎えていただき、若手職員の活気もあり雰囲気の良い職場環境の中で業務に取り組むことができました。事業自体が過去に例のないものであったため、毎日活発な意見交換をしながら業務を進めていました。業務以外でも、若手の職員の方々とも交流でき、市内の案内等をしていただき、いろいろな場所を回ることができました。

職場内での活発な意見交換、住民や業者とのやり取りも含め、非常に充実した時間を過ごすことができ、復興事業を通じて自分自身も成長したと実感できる1年間でした。

今後もいわき市職員の方々と連携をとり、情報共有を図っていければと思っています。



▲派遣先部署の皆さんと



▲被災地支援活動の様子



山口県宇部市都市整備部  
道路整備課

和田 正寛さん

## 災害に備え地域を支える 「つ・な・が・り」

私は、平成24年（2012年）の半年間、自ら志願し、福島県いわき市（以下、いわき市という）の復興支援に携わらせていただいた。当初、私は関西地方以東に訪れた経験がなく、まるで別世界に来たような感覚を抱いたことを今でも覚えている。さらに、私は人見知りな性格であり、職場に早く馴染めるかが一番の不安要素であった。勿論、現在もこの厄介者にお世話になっている。

さて、復興支援を自ら志願した理由は何か。「復興のために何かしたい」という純粋な思い、が答えである。いわき市では、被災した道路の復旧・新設業務に従事したが、当時26歳の私は、下水道業務に従事した経験しかなく、事務手順も本市とは異なっていたため、前途多難な日々が始まった。当時、発災から約1年半が経過していたものの、いわき市職員の皆様は、震災への対応に日々追われ、肉体的にも精神的にも疲労のピークに達していたことと思われる。そのような状況下においても、いわき市職員の皆様は、日々戸惑う私に親切に接してくださったので、新しい環境に馴染むのにそれほど時間を要さず、「人見知り」の問題は杞憂に終わり、同時に、「人の温かさ」を感じた。

また、いわき市だけでなく、その他市町村職員と人脈形成できたことは大きな財産となっている。人脈の形成は、「困った人を助ける」ことにもつながり、これは災害時に重要となる、いわゆる「共助」である。

全国では人口が加速度的に減少し、ヒト、カネの不足が問題視されていることは周知の事実である。近年は、自然災害の激甚化による想定外の気象災害が頻発し、また、南海トラフ地震の発生も予測されている。災害への対応が求められているが、時間軸や財源の制約上、モノの整備の継続は現実的ではなく、また、ヒトの不足により、公的支援（公助）にも限界がある。今後、自ら命を守る行動を取る「自助」、人同士が助け合う「共助」等のソフト対策が、危機管理において取り組むべき重要課題であると考えている。

私は、復興支援の経験から、「つ・な・が・り」を大事にしている。「つ：常に新しい情報を収集し視座を高める」、「な：何でも取り組む」、「が：頑張り過ぎず皆で力を合わせる」、「り：良好な人間関係の構築」である。これは私案であるが、災害に備える上で、重要な4項目ではないかと思っている。

令和3年3月11日で、東日本大震災から10年が経過した。被災地では、街に賑わいが戻りつつあるも、一部の地域では復興が進んでいないことも事実である。なお、本市は、過去に5名の職員をいわき市に派遣（中長期）している。私はともかく、他4名の職員は手腕を発揮し、いわき市の復興に大きく貢献したことと思う。私はというと、夜の街の復興に全力投球し、プライベートで大活躍した。

「できないこと」を恐れず、何か行動を起こすことが大切で、それが他者だけでなく自分自身の力にもなる。地域間で協力し合い、一日でも早い復興を願っている。その暁には、一緒に働いた全国の派遣職員がいわき市に集結し、酒を片手に思い出話に花を咲かせたい。



陸上自衛隊高田駐屯地業務隊  
補給科長 一等陸尉

本間 浩さん

## 東日本大震災災害派遣活動を 振返って

まずは、この未曾有の大震災により、お亡くなりになりました方々のご冥福を改めてお祈り申し上げます。

よく「災害は忘れた頃にやってくる。」と言われますが、先般、令和3年2月に福島県沖を震源とする最大震度6強の地震が発生し、約10年前の東日本大震災発生当時の記憶を思い出させることとなりました。未だ余震が続く中、大きな被害が出ないことを願っています。

東日本大震災発災当時、私は、第二普通科連隊に所属し、第三中隊で運用訓練幹部として災害派遣活動に従事しました。自衛隊入隊以来十数回の災害派遣活動に従事した私ですが、今まで経験した事のない様々な脅威に対応しながらの災害派遣活動でした。本災害派遣活動においては、発災直

後から福島県いわき市に入り、大きな余震が断続的に発生する中、津波を警戒しつつ、人命救助活動を行いました。また、福島県内においては、福島第一原子力発電所の原子力災害に伴う放射線対処を行いながらの人命救助活動・民生支援活動及び復興支援活動を行いました。約3ヵ月間に亘る隊員の献身的な支援活動が微力ながらも復興に貢献したものと今でも思っています。

発災直後、第二普通科連隊は、いわき市消防本部庁舎内に指揮所を開設するとともに、上荒川公園内総合体育館に宿泊し、全隊員がいわき市の皆さんを助けるぞという思いで人命救助活動を開始しました。湯本、久之浜、四倉、平豊間、永崎、小名浜そして勿来と隊員は黙々と泥にまみれ、頻発する余震の中、地震や津波の被害により発生した瓦礫の中に入り、またある時は胸まで水に浸かり、人命救助活動を実施しました。福島第一原発30キロメートル圏内に最初に捜索に入りましたのが、私が所属していた第三中隊でした。捜索現場は久之浜の末続地区でした。放射線という見えない脅威の中、原子力災害対処のため、各隊員には、日々の被爆量を計る個人用線量計を携行させるとともに、各捜索現場の放射線量を測定しつつの人命救助活動でした。隊員の身の危険を顧みず果敢に任務に挑んでいく姿勢を目の当たりにし、運用訓練幹部として頼もしく思えたことが思い出されます。その後、第二普通科連隊は、広野町、檜葉町、飯舘村そして南相馬市と支援活動を進めて行きました。

この災害派遣活動を通じて感じたことは、地域の絆の強さ（コミュニティ）でした。各捜索現場及び避難所等において、各地区の区長様、民生委員の皆様、そして住民の皆様からの津波発生当時の情報提供などのご協力を得て、捜索活動を進めることが出来ました。コミュニティに助けられた災害派遣活動でした。そして自助・共助の重要性を身をもって感じる事が出来ました。また、災害派遣活動期間中に、いわき市立湯本第二中学校の入学式に来賓としてご招待を賜り、第二普通科連隊長の代理として参加させていただき、あの時の入学生が今は社会人になっていると思うと、時の流れの速さを感じるとともに感慨深いものがあります。

困難な状況の中、いわき市の皆様に温かく迎えられ、感謝されて撤収できたことは第二普通科連隊の最大の成果であり、隊員にとっては、大きな達成感を得たものと思っています。いわき市の復興は、未だ道半ばと思いますが一日も早い復興を願ってやみません。いわき市の皆様の温かい笑顔とご協力に感謝申し上げます。



▲豊間地区



▲小高地区



びあ株式会社 代表取締役社長  
矢内 廣さん

## エンタテインメントの力で 「心の復興」を

震災から10年を経ましたが、未だにその傷の癒えていない被災地や被災者の皆さまに、心よりお見舞いを申し上げます。

私たちが「チームスマイル」と名付けた復興支援のプロジェクトを立ち上げたのは、震災直後のことでした。私の生家も、多くの知人・友人も被災しましたが、私たちの社業であるエンタテインメントには、被災地の方々に勇気や元気を届ける力があるはずだ、そう信じた有志によって自然発生的に生まれたボランティア活動でした。

衣・食・住の整備が進みつつある中、「心の復興」を中心に、被災地の方々と支援者が想いを共有し、「共に立ち上げられる仕組み」を継続的に作り出すことを目指して、翌年には正式に一般社団法人化しました。

国庫や自治体からの資金拠出を仰ぐことなく、多くの民間企業、団体より篤いご協力やご寄附・協賛を賜り、東北三県（福島、宮城、岩手）と東京に、その活動拠点となる『P I T（ピット）』（P I Tは「Power Into Tohoku!」の頭文字）を開設しました。真砂不動産の協力のもとにオープンした「いわきP I T」も、コンサートや演劇、ライブビューイング等のイベントの他、特に子供や若者たちの創作活動へのチャレンジをサポートし、その表現や発表の場を提供してきました。特に「“わたしの夢” 応援プロジェクト」では、各界の著名人の皆さんを被災地にお招きし、若い世代の夢や才能を応援することで、地元の子供たちが夢を持って元気に立ち上げられるようなきっかけ作りを進めてきました。

お陰さまで、東北各地のP I Tは、復興のシンボルとして地元の皆さんを中心に様々な活動に活用され、「“わたしの夢” 応援プロジェクト」の開催も24回を数えました。残念ながら2020年は、新型コロナ禍の影響でほとんど活動はできませんでしたが、折に触れて地元の皆さんからの報告を聞く限りでは、いわきの復興を多少なりとも後押しすることができたのではと思っています。まさに震災から10年を一区切りと考えてきましたが、活動のできなかつた昨年の分だけもう1年その活動期間を延長し、2022年の3月まで継続しようと考えております。その後は、民間で繋いできたこのバトンを、行政にしっかりと受け継いでいただければと期待しています。

活動終了の折には、多くの支援者や利用者の皆さま、「東北P I T応援団」に手を挙げて下さった多くの著名人の方々、そして何より、この活動のために毎回50円を寄付して下さいました「豊洲P I T」の観客の皆さんへの御礼を兼ねたイベント等も開催し、明るい未来への橋渡しをしたいと思っています。そのためにも、今は一刻も早いコロナ禍の収束を願ってやみません。



▲2015年7月にオープンした「チームスマイル・いわきPIT」



▲プロサッカー選手・清武弘嗣さんを迎えて行われた「“わたしの夢” 応援プロジェクト」（2016年6月11日開催）



スポーツジャーナリスト・  
大阪芸術大学教授  
**増田 明美**さん

## 心にサンシャイン

いわきサンシャインマラソンにはゲストランナーとして第1回から参加しました。2回大会の2011年2月のこと。大漁旗を振る威勢のいい応援に、膝が3センチ位上がったのを思い出します。あの時はその翌月に東日本大震災が起こるなんて誰も予想していませんでした。地震と津波で大変な被害に遭ってしまっ<sup>よみがえ</sup>た、いわき。マラソンでお世話になった優しいスタッフの皆さんの顔が蘇<sup>よみがえ</sup>り、夫と共に常磐道が復旧した日にお見舞いに伺いました。道路にはひび割れやでこぼこが多く、被害の大きさを感じたのです。役場や消防署、体育館でスタッフの皆さんが一生懸命働きながらすぐ喜んでくれたのを思い出します。

そして2012年2月、大会は開かれまたゲストランナーとして呼んでいただきました。「今度は私が大漁旗を振るように元気を届けよう」と思って走り始めると、沿道には人がいっぱい。切れ目のない声援に、「ありがとう」「がんばっぺ」という横断幕がいくつもあってすごく励まされました。あの時の走る人と見る人、支える人の一体感から生まれるエネルギーを忘れることはありません。マラソンが復旧、復興に勢いをかけている！と実感した時間でした。

その後いわき応援大使にも任命していただき、大使が集まる懇親会で、ケーシー高峰さんと橋田壽賀子さんにお会い出来たことも貴重な体験です。ご挨拶でケーシーさんが「震災も怖いけど、本妻はもっと怖い」と会場を明るくし、最後は「浜通りが元通りになりますように」と話され、流石<sup>さすが</sup>だなあと、うなつたことを覚えています。橋田さんは「メヒカリが市場に出たとニュースで聞き、涙がこぼれました」としみじみと話されました。応援大使になったお陰で、いわきのことをより良く知ることが出来て嬉しいです。また、いわきが故郷の柏原竜司さんとお会いすると、いわきの新しい情報をたくさん教えてくれます。家族旅行で行ったスパリゾートハワイアンズは、きっと今コロナ禍で大変だと思います。今度家族でゆっくり遊びに行きたいと思っています。



▲いわきサンシャインマラソン



福島県双葉町長  
伊澤 史朗さん

## —双葉町への帰還を目指して—

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から10年の歳月が過ぎましたが、双葉町は今もなお全町避難が継続しております。

いわき市には平成25年6月から双葉町役場いわき事務所を設置させていただき、平成26年4月には幼稚園、小・中学校を再開、8月にはいわき市錦町に建設を進めていた町立学校仮設校舎が完成し、子どもたちが学校生活を送っております。町立学校の給食についてもいわき市のご厚意によりいわき市学校給食調理場から提供いただいております。いわき市は双葉町から距離的にも近く、気候風土が双葉町と似ていることから、いわき市内において復興公営住宅に入居した人や自宅を再建した人など現在も2,000人以上の双葉町民が市内において避難生活を送っており、受け入れていた

だいた清水敏男市長様はじめ、いわき市民の皆様のお心両面にわたる温かいご支援に心から感謝しております。

双葉町は長い間、帰還困難区域が町域の96%を占め、何もできない状況が続いていましたが、平成29年の福島復興再生特別措置法の改正により、特定復興再生拠点区域内555ヘクタールの除染や建物解体が進み、2020年3月には、常磐双葉インターチェンジが供用開始し、JR常磐線の全線開通に合わせて双葉駅舎と東西自由通路が完成しました。さらに避難指示解除準備区域と双葉駅周辺の一部区域の避難指示が解除され、特定復興再生拠点区域内の立入り規制が緩和されました。2020年秋には「働く拠点」である中野地区復興産業拠点内に双葉町産業交流センターと県の東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンするとともに、復興祈念公園の一部が供用開始となりました。産業交流センターは、働く拠点内の中核的施設として施設内に貸事務所及び商業施設を備えており、町内事業者の事業再開に向けた立地支援と企業誘致にも積極的に取り組み、現在19件、24社との立地協定を締結しました。

町の基幹産業である農業は、野菜の試験栽培や除染後の農地の保全管理作業が行われるとともに営農再開に向けたビジョンを作成する等、帰還後の速やかな町内での営農再開に向けた具体的検討を進めております。

「住む拠点」として整備している双葉駅西地区については、『標葉の谷戸に抱かれたフロンティア「開拓者」と共に育むなりわい集落』をコンセプトに、2022年春頃の居住開始を目指して、災害公営住宅等を核に自然環境を活かしたまちづくりを進めております。

特定復興再生拠点区域の避難指示解除とともに、役場機能を双葉町に戻すこととなりますが、今後もいわき市とのお縁を大切にさせていただきながら、町の復興と町民の帰還を目指して参りますので、よろしくお願いいたします。



▲双葉町産業交流センター



▲東日本大震災・原子力災害伝承館

## いわき市・東日本大震災復興記憶集への寄稿



福島県広野町長  
遠藤 智さん

この度の「いわき市・東日本大震災復興記憶集」の発刊を心よりお慶び申し上げます。

東日本大震災及び原子力発電所事故から10年が経過しました。広野町は、未曾有の原子力災害により緊急時避難準備区域に指定され、全町避難を余儀なくされましたが、このような絶望的な状況から立ち上がり、御市をはじめ国内はもとより国際社会からも多くのご支援、ご厚情をいただき、町民9割の帰還を成し遂げ、定住・滞在者を併せ約7,000名、みなし居住率150%、福島復興への安心・安全な防災に強い「共生のまちづくり」に邁進してきました。

厳しい避難生活を乗り越え、今こうしてふる里への安心・安全な「共生のまちづくり」を前進できますのも、いわき市内に役場機能として湯本支所を設置させて頂き、一時避難として受け入れていただいた福島高専、二次避難として受け入れていただいたホテルハイアーンズをはじめとする市内のホテル・旅館の皆様、三次避難として仮設住宅を受け入れていただいた市内各地区の皆様、震災から10年を経過した現在においても、広野町からの避難者の多くが御市で避難生活を続けておられて、いわき市民の皆様より賜りました多大なる心温まる御支援に対しまして、重ねて感謝の意を表わし、厚く御礼申し上げます。今後とも、引き続きご支援を賜れば幸いです。何卒、宜しくお願ひ申し上げます。

令和2年2月、広野町を含む双葉8町村は、いわきF Cのホームタウンになりました。Jヴィレッジの立地町として、町を挙げていわきF Cを応援し、新たなスポーツ文化の賑わいの創出に向け、御市と一体となって取り組んで参りたいと存じます。

令和3年3月、エネルギー被災地から新エネルギー社会の創出に向けて、火力発電所を有する町として、「ゼロカーボンシティ宣言」をいたしました。バッテリーバレー構想を推進する御市の取り組みに敬意を表わし、本町は、ふる里の歴史、伝統、文化に対する誇り、継往開来を念頭し、本年を“ふる里復興・創生「躍進の年」”と位置付け、私たちは新たな時代へ福島イノベーション・コースト構想に向けた「創生のパイオニア」となるべく、安心・安全な「共生のまちづくり」を着実かつ確実に進めて参ります。

新たな10年へ向け、いわき市御市・双葉地方・浜通りから福島復興へ、リスペクト、地域連携の力強い躍進を図るとともに、御市の復興・創生の益々の御隆盛、御発展を忠心よりご祈念申し上げます。



▲県道浜街道“広野小高線”（通称：浜街道）「ひろの防災緑地」「広野駅東側開発整備事業地区、西側住宅・教育・役場ゾーン」（令和元年5月）



国立研究開発法人日本原子力研究  
開発機構 前福島研究開発拠点  
安全管理部長

### 植頭 康裕さん

## 東京電力福島第一原子力発電所 事故への対応

2011年3月11日、私は茨城県東海村の原子力機構（以下、機構）本部に勤務していた。事故後、ひたちなか市の原子力緊急時支援研修センターで環境モニタリングの指揮を執った。

当時、いわき市に残した父と母のことが頭から離れなかった。父は胃がんとを患い、いわき市立共立病院（現在のいわき医療センター）に入院し、母は一人で家を守っていた。同年4月18日朝、父が危篤との連絡を母から受けたが、モニタリングが多忙ですぐに病院に向かうことはできなかった。夜中に実家に駆け付けたが、父は既に冷たくなっていた。

同年6月30日、機構は福島市に事務所を設置し、私は環境モニタリングとホールボディーカウンタを用いた県民の内部被ばく検査の責任者となった。当時、行く先々で「関

東から評論家が来ても事故は収まらない。」「福島県民の気持ちが分らない奴が偉そうな事を言うな。」と言われた。そんな時に「生まれも育ちもいわきの平です。誰よりも県民のことを思っています。」と言うと、興奮していた方々が話を聞いてくれるようになった。

同年11月にはいわき市民の内部被ばく検査を開始した。受検者に測定結果を示し、放射線障害が生じるレベルではないと丁寧に説明した。機構は約29,000名の方を測定、評価した。

一方、放射線の理解を深めるため、PTA、中学生、高校生、大学生を対象に「放射線に関する質問に答える会」を実施するとともに、将来の廃炉を担う大学生向けの人材育成事業を企画した。回を追うにつれ、質問（放射線の恐怖、飲食物中の放射能、健康影響、情報伝達の難しさ等）が変わり、放射線の理解が進んできたことを肌で感じた。

その後、国際放射線防護委員会（ICRP）と共同でダイアログ（対話集会）をいわき市で2回開催した。ここでは、経験を将来につなげていくため語り合ってもらった。さらに、昨年12月にいわき市文化センターをパブリックビューイング会場に据え、ウェブを用いた「ICRP/JAEA原子力事故後の復興に関する国際会議」を開催し、準備委員会委員長として会を進行した。国際会議には101か国、約2,500名の方が参加した。国内外の著名な研究者や地元で活動されている方が復興の状況や復興に必要な要素について議論した。

この4月の人事異動でいわき市を離れることになったが、これまでにない濃密な10年間であり、少しは故郷への恩返しのできたかと思っている。いわき市が震災から復興し、これまで以上に発展されることを祈念する。



▲福島高専における人材育成の様子



▲福島高専生を対象とした人材育成の様子



▲ダイアログセミナーの様子



一般社団法人A F W 代表理事  
吉川 彰浩さん

## 福島＝人を社会を、豊かにする場所 と思ってもらえるために

私は今、一般社団法人A F Wという団体を作り、福島第一原発と周辺地域を題材として主に県内外の学生（中学・高校・大学の学生）に向けて「福島と聞けば人生を豊かにする気づきに溢れる場所」と思っただけのように教育事業とコーディネート・アテンド事業を行っています。

この社团は原発事故を契機に作りました。私は元々、福島第一原発で働いていた東京電力の社員の一人です。安全だと言い切っていた場所で事故を防げなかったこと、これは自分の人生の中で、絶対に忘れてはいけないことですし、またその出来事を後世が豊かな時代を築けるために、伝え続ける義務があると考えています。

私は生まれが福島県にありません。東京電力に入ることで、福島第一原発に勤め、そして双葉郡で暮らしてきました。その人生の中には、よそ者である自分を育ててくださった地域への思いと、こちらで家族を持ち、福島県民になった思いがあります。楽しかった思い出、ありがたい思い出、周りに知人がいなくて寂しかった自分を救ってくれた思い出、数えきれない思い出があります。

私はこの浜通りで豊かに暮らし続けていきたいと思っています。原発事故後、東京電力を退職し自分が守れなかった約束と向き合いつつ、あの場所で起きたこと、それからとこれからを次世代に伝え、共に考えていく教育事業を行いながら。

活動を通して、たくさんの原発事故で人生が変わられた方と交流をしてきました。お一人お一人の人生の尊さを学ぶ毎日です。私は、その尊さは、福島県の方だけでなく、全国の方、そして原発事故を経験していないこれからの方にもあると思っています。

その『尊さ』を知り守ろうとすることが、東日本大震災・原発事故の教訓になると私は思っています。教訓を活かした社会に向けて、あれから10年が経ちましたが、教育事業として原発事故があった場所、それによって影響を受けた地域を学びの題材とし、『人をそして社会を豊かに出来る福島』と誰にとっても思っただけのような未来を創っていくために、活動を続けていきます。



▲教育事業の取り組み風景

## —海まち・とよま—



▲筆者 手前右から3人目

独立行政法人都市再生機構  
福島震災復興支援本部  
復興支援部大熊復興支援事務所  
まちづくり整備課

**栗城 英雄さん**

UR都市機構はいわき市さんと「協力協定」を締結し、薄磯及び豊間地区の土地区画整理事業を協働で実施させていただきました。私自身は2013年4月から2018年3月までの5年間、まちづくりの担当として携わり、カウンターパート（受け入れ担当機関）である都市復興推進課（当時）の皆さんと、時には深夜まで、時には熱くなりながら議論をし復興を進めてきました。

両地区の復興計画では被災された方が高台に安心して戻れるようにと、山の土を平場に盛土して宅地を造成することとしていましたが、工事を開始する前の調査段階では、津波で流された家屋の基礎だけになった広大な地区を眺め、自分ひとりでは何もできない無力さを感じたこともありました。また、工事期間中は土を削る重機とダンプが走る音だけが響き渡り、強風が吹けば砂嵐のような状況で、（初期段階は特に）いつになつた

ら住民さんが戻れる環境が整うのかと思ったことが思い出されます。

印象深かった出来事は2017年7月15日、薄磯海岸の7年ぶりの海開きでしょう。例年だとまだ肌寒い日もある7月の中旬ですが、その日は海に入りたくなる陽気で、子供を連れた海水浴客やそれをもてなす地元の方々、フラを踊る高校生などで大賑わい。そんな方々に薄磯・豊間を知ってもらおうと「海まち・とよま市民会議」の方々とコラボして地区を巡るバスツアーを実施しました。私も「にわかバスガイド」を務め、お祭り騒ぎの一日でした。震災を機に賑わいが消えてしまった東北随一の海水浴場でしたが、7年の歳月を経てもまた多くの人々が戻ってきた姿を目の当たりにして、薄磯の海の豊かさを感じさせられました。他にも、地区の皆様とは復興への願いを共に祈念して防災緑地や公園に桜やどんぐりの木を植えるイベントを一緒に開催させていただきもしました。復興事業に携わったことでそのような数々の節目を関係者の皆様と一緒に喜び合えたことは、今でも心の中の宝であります。

先日、久々に近くを通りがかった際に地区に寄ってみると、少しだけ成長した桜、公園で遊んでいる親子連れ、高台にだいふ増えた戸建て住宅、真新しい伝承館など、ゆっくりとですが着実に進みつつあるまちの再生を感じることができました。

これから先も地区の方々が中心となりコミュニティの再生が一步一步進んでいくものと思いますので「海まち・とよま」がどんな風になっていくのか楽しみに今後も見守らせていただけたら幸いです。



▲薄磯海岸にて7年ぶりの海開き式典



▲豊間防災緑地にどんぐりを植える様子



イオンモール株式会社  
代表取締役社長

岩村 康次さん

## 地域とともに取り組んだ、「いわき “絆”プレイス」創りへの想い

いわき市の皆さま、この度は、「東日本大震災復興記憶集」の発行にあたり、このような寄稿の機会を頂き、心より感謝申し上げます。

東日本大震災から10年を迎えましたが、改めて、この震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。

私は当時、関東・東北開発部長として、被災した地域を担当しておりましたので、被災直後に、当社事業パートナーの皆さまへのお見舞と、被災状況確認のため、各地を巡回いたしました。あの時の光景を未だに忘れることはありません。

また、開発マンの端くれとして、被災地復旧支援だけではなく、被災以前よりも地域が賑わい、震災復興事業により地域の未来を拓くような、被災地復興街づくりに、長期的に貢献できることがないかと考え、被災地を奔走していたことを思い出します。

特に、個人的に海が好きであったこともあり、震災前より、那珂湊～勿来海岸、小名浜港によく足を運んでいましたので、小名浜地区の被災状況を目の当たりにし、大きな衝撃を受けましたが、小名浜地区の皆さんの復興行動の速さにも驚かされました。

それから、復興事業創造のために、津波災害の復興事業というものを本質的に理解すべく、図書館やインターネットの文献にて、津波災害について学ぶとともに、北海道南西沖地震にて、同様に津波で被災した、奥尻島に部下を派遣し、復興状況や地域の皆さまからの、復興事業に関するご意見や、ご感想を聴く機会を設け、開発企画に取り組んでいました。

そのため、2012年に、「小名浜港背後地（都市センターゾーン）開発事業協力に関する協定」を締結できた時は、本当に感慨無量でしたが、地域の皆さまへの計画説明会を通じて、地域の意見をお聞きするにつれ、成し遂げなければならないことに対する責任の重さを改めて痛感いたしました。

本協定締結後、いわき市役所、小名浜まちづくり市民会議の方々をはじめとした、地域の方々とは真剣に話し合った時間は、これまでの仕事の中で、とても貴重な充実した時間であり、そこで出会った皆さんは、今でも、私にとってかけがえのない存在になっています。

イオンモールいわき小名浜が真の復興拠点づくりに貢献できたか否かは、これからも地域の皆さまと協調し、小名浜港が、賑わい溢れる多世代交流拠点となるよう、永続的に取り組んでいくことでしか答えを得られないものだと考えていますので、これからも末永いお付き合いをお願いいたします。



▲イオンモールいわき小名浜①



▲イオンモールいわき小名浜②



株式会社47PLANNING  
代表取締役  
鈴木 賢治さん

## 2031年に向けて

株式会社47PLANNINGは2009年、私が26歳の時に東京で創業しました。創業当時、地元である福島県いわき市を「食」の力で活性化するために、キッチンカーを2010年10月に完成させました。さらに、東京に「食」の情報発信拠点としての飲食店「47DINING福島」を作ろうと、2010年12月に物件を契約し、改装も終わり2011年4月にオープンという矢先に、東日本大震災が発生しました。私の実家である四倉町の丸和製氷冷凍株式会社も津波で全壊し、父親は一時生死不明になりました。幸いにも父親は無事でしたが、理不尽にも多くの命と建物や経済が破壊されていることに直面した際、「人の命には限りがあり、いつ死ぬかも分からない」という現実に向き合いました。そして「いつかやろうじゃなく、思ったことは全部やる」「一歩踏み出すことに意義がある」と心に決めました。震災直後、キッチンカーで地元の四倉町で四倉町商工会の助けも得て炊き出しを行いました。その時考えていたことは、単発で終わらせず、長期的に地元復興のために、我々は何をすべきなのか考えていました。考えた結果生まれた企画が「夜明け市場」の企画でした。当時、余震が続いており、復旧、復興も、どうしていいかわからない。まるで暗闇の中にいるようでした。しかし、みんなで前を向いて、「必ず復興出来る」と信じて前に進めば、きっと夜は明けるはずだと思い、「夜明け市場」と名付けました。地元の方をはじめとしたたくさんの方々力を貸していただき、結果として2店舗から始まった夜明け市場は15店舗もの新規のお店が入り、復興のシンボルとして大勢の方が来ていただける場所になりました。10年経った今も地元の方に愛されているお陰で、全店舗が埋まり営業を続けています。

震災から10年経ち、震災当時に決めた「震災前より良い福島にしたい」は、まだまだ道半ばだと思います。

私は今こそ「福島の食」の魅力を世界に発信すべきだと考えます。弊社では、いわきFCのオフィシャルカフェ「RED&BLUE CAFE」で地元の豆腐、卵、牛乳を使用した「クリームパンケーキ」を開発しました。そして、2021年3月には木戸川のいくらを、ミシュラン3つ星の「京都吉兆」レシピ監修で、奇跡のイクラ「SUZUKO」を開発することが出来ました。震災という逆境をバネにし、次の10年は「福島の食の魅力」を全国、世界に発信し、沢山の方に魅力を伝え、当地へお迎えできるような「場づくり」をしていきたいと思っています。



▲クリームパンケーキ



▲奇跡のイクラ「SUZUKO」



神奈川県横浜市交通局  
(現在、一般社団法人横浜市交通  
局協力会に出向中)

古川 孝一さん

## 『横浜発⇄いわき行き』の “架け橋”として

東日本大震災復興記憶集へ寄稿させていただくにあたり、改めて震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

私といわきの出会いは、平成25年春から運行を開始した「ハワイアンズエクスプレス横浜便」。運行開始にあたり心配したことは、当時、県外はおろか、福島県まで運転経験のある乗務員のいない横浜市交通局が運行を担当することで、ハワイアンズさんの評判を落とすことは出来ないというプレッシャーでした。その思いを乗務員チームに伝えると、「ハワイアンズ送迎バスの一番になろう」という何とも頼もしい答えが。この目標へ向かい、お客様を安全にお送りする習熟訓練はもちろんのこと、お客様に楽しんでもらうためには、乗務員の第一印象が大切だと考え、発車前の案内を日々訓練し、お客様に分かりやすくなるよう、チーム一丸となって工夫

しました。

その一つが、乗務員からお客様への車内案内。

「これから向かいます、いわき市の天候は雨で気温が3度、少し寒いようですが、ご安心ください、ハワイアンズは一年中、常夏でございます」

瞬く間に和やかな雰囲気になり、車内には大きな拍手が。これまでの苦勞が実を結んだ瞬間でした。

「ハワイアンズエクスプレス」が、まさに“架け橋”となり横浜といわきのつながりは、より一層強くなっています。

平成25年8月には「横浜市・いわき市友好記念イベント」を、横浜市営地下鉄センター南駅前広場で2日間開催。当日、いわきの皆さんは、朝早く出発し会場に駆けつけ、大急ぎで会場を設営、いわき自慢の物産品などの即売会を行いました。また、スパリゾートハワイアンズのダンシングチームには華やかなフラダンスを披露していただき、大成功を収めた2日間でした。

この友好記念がきっかけとなって、平成26年秋から小名浜で開催されている「いわき大物産展」では、横浜中華街の『重慶飯店』に協力いただいて、中華菓子などの販売も始まっています。

そして、いわきの皆さんも大きな被害に遭われた令和元年10月の台風19号の際には、ボランティアセンターの開設を知り、「みんなでお手伝いに行けないか」と提案。交通局長を先頭に、市営交通グループの有志が集まり、ボランティア当日は瓦礫がれきの分別作業のお手伝いをさせていただきました。3時間程度で作業終了の時間となってしまう、後ろ髪を引かれる思いで帰路のバスに乗り込んだことを覚えています。

このように、「ハワイアンズエクスプレス」運行開始以来、いわきの皆さんといろいろな交流がありましたが、様々なご苦勞に遭いながらもいつも温かく迎えてくれる、いわきの方々の人柄が大好きです。

今後も今まで以上に“架け橋”として、いわきの皆さんとお付き合いが出来れば最高です！



▲「いわき市フルラッピングバス」  
横浜市内を2両が運行しています。  
(フラっと いわきにきてくんちえ)  
@赤レンガ倉庫にて



▲定刻でハワイアンズエクスプレス  
横浜便が、ハワイアンズに到着



タレント  
カンニング竹山さん

## いわきの元ヤンキーを探して。

私が初めていわきを訪れたのは震災から3ヶ月ばかり経った日のことだったと思います。まだ小名浜辺りも皆さんがご存知のように瓦礫の撤去は始まっていましたが、まだまだ震災の爪痕が生々しく残ってありました。正直その時に見た時の印象はゆかりもない場所ではございましたが、悔しくて悔しくてたまらないという心の奥底から滲み出る災害に対する憎しみと怒りが込み上げて来たのを覚えています。しかし、まだ当時は「自分が何をしたら良いのか？何が出来るのか？」さえ分からず、ただただ、初めて訪れたいわき、そして福島にの地に立ち竦すくんでいるだけでした。

それから1年ぐらい経った頃でしょうか、自分が出来る事、自分が福島県と向き合える事とは何だと悩んだ挙句、私は観光をし福島県をうろろぶらつこう、そしていろんな県民の方々と触れ合おうと福島の旅に出ました。それが私の中の福島と向き合う一つの結論だったのです。

そして私はいわきの地に再びやって来ました。SNSを使い触れ合いを増やそうと、あえて今いわきに向かっている事を伝えると沢山のメッセージが。その中から私はぜひ来てくれとSNSをくれたFMいわきの中で働く方を訪ねました。しかしその方は勤務時間が終わっていらっしやなく、何も事情を知らないにもかかわらずFMいわきのお偉いさんがアポもなく突然押しかけた私に大変優しく接してくれ、震災のあれこれを教えてくださいました。今でもあの出会いは非常に感謝しております。そこから私といわきの関係は始まったのです。SNSを送ってくれた方ともまた会社に戻って来てくれてお会いする事ができました。勿論その方との出会いにも感謝です。

そして私の初めてのいわき観光が始まりました。その日私はいわきをぶらつきました。アクアマリンふくしまの外で私はその日学校をサボってデートしていた高校3年のちょっと悪そうなヤンキー風の兄ちゃんに会い話をしました。いろんな事を話し私は「卒業したらどうすんだ？東京で働くのか？」と聞きました。そうするとそのヤンキー兄ちゃんは「いや俺ら若い世代がこのいわきに残りこの街を支えていかないと誰がこの街を建て直すんだよ、だから俺はこの街で働く、ずっとこの街で生きるんだ！」と。私は自然と涙が出ました。「やるな、このヤンキーのガキめ」と泣きました。この出会いが今でも私がいわき、そして福島県に向かう理由の一つかもしれません。いつの日か今はもう30前になっているであろうあのいわきの兄ちゃんといわきで酒を飲むのが、いわきでの私の次の夢です。



前いわき市消防団長  
大久保 克己さん

## 防災対策の一手 消防団員の確保

「砂浜から150メートル沖にある小島まで潮が引いたら、本物の津波が来るぞ。」

これは、自分が若い頃、先輩の団員に聞かされた、言わば『言い伝え』である。もちろん後輩団員にも話し聞かせてきたわけだが、あの日の海は、小島どころか、さらに奥、200メートル先まで海底が露出したと言われている。その後の惨状は周知の事実であろう。

それまで消防団員として、火災全般、台風等の水災害、行方不明者の捜索など、様々な活動に従事してきたが、いずれも活動の終期が予想できるものであった。

しかし、地震、津波という二重の自然災害に加え、原子力災害も相まって、先の見えない活動は、体力、そして精神力をも奪いかねない状況であったが、いつ終わるかもわからない災害現場を前に、当時の団長をはじめ団員の気力は潰れることなく、その姿を目にした私は、「素晴らしい消防団だ。」と目頭が熱くなったことが思い出される。

ここに活動に従事した全消防団員に対し、改めて感謝の意を表したい。

本市は、復興の道をたどり、元の元気な姿に戻ってきた矢先に、令和元年東日本台風による水害が発生し、多くの尊い命が失われるなど大きな被害を受け、改めて自然災害の恐ろしさを痛感することとなった。

平成28年に消防団長を拝命し、地域住民に密着した消防団を信条に活動を続けており、震災で得た教訓から、被害が大きな地域へ管轄外の団員を集結させて、「オールいわき」の心持ちで被災した市民のために全力で活動するよう指示を出し、給水活動や災害ごみの収集等様々な活動にあたった。

日本全国で、自然災害が猛威を振るっており、各地で甚大な被害が発生し、地域の実情を熟知した我々消防団に寄せる期待はますます大きくなっていると感じる。

「災害に強いまち」を考えたとき、ハード整備では限界があるものとする。

いざ災害が発生した際に動ける人の数こそ、住民の安心につながるのではないだろうか。

かくいう私は昨年3月に一線を退いた。

市民の生命身体を守るという、崇高な使命を胸に携え、「地域のために活動したい!」という若者が一人でも増えてほしいと願うところである。



▲消防団による復旧活動の様子



いわき市女性消防クラブ連絡協議会  
会長

### 遠藤 和子さん

## 勇気を出して！命を守る！一声を

たばこ組合に勤務している私は、勤務先で外出中に地震にあった。事務所には地震と毛虫が世界一嫌いな同僚の彼女がいる！強い揺れを感じながらも事務所に到着。近くの公園の路肩に座布団を敷いて座っている彼女を発見。無事だ！良かった。自宅は、台所の食器棚が倒れ、寝室の壁は倒壊、断水と半壊の被害。同居家族は孫を含めて無事だった。夕飯時にテレビで津波の映像を見た。恐ろしい情景が目飛び込む。日本地図の海岸線の赤マークを目にしているにもかかわらずイメージが頭に無かった。無知な自分がいた。四倉に住む長男家族には連絡がつかない。海沿いではないが避難したのだろうか？不安だった。

女性消防クラブ員と民生委員をしている自分は、夜7時位から地域の独居高齢者宅へ向かった、持参物は懐中電灯、飲料水、ヘルメット、ラジオだと記憶している。幸い担当地区の皆は無事で怪我も無かった。持参した物を希望する方に渡した。帰り足で内郷コミュニティセンターの避難所に行ったところ、実家の母と弟家族が避難所にいた。とても驚いた。

職場は断水と原発の影響の為に当分の間休業となった。二日目には女性消防で避難所への炊き出しを開始した。断水の内郷公民館での作業、午前と午後の2回、約1か月余り試行錯誤しながら毎食2,000個のおにぎりを握った。しかし原発の放射能の関係で外出自粛が発令されてからは、家族で遠方へ避難するクラブ員もいた。その間に、建物漏電火災で担当の高齢者が焼死した。地震では助かった命、悔やまれた。避難所へはいわき市社会福祉協議会経由で母の古着を提供した程度の支援しか出来なかった。自分自身の心の余裕が無かったと思いつつ。

震災から10年経過する過程で、内郷地区民生児童委員協議会（民児協）は高齢者への緊急避難カード配布や、避難所炊き出し実習、有事の際の防災グッズ作成等の研修をした。女性消防活動では民児協への講習や高齢者世帯の訪問、防災訓練、地域の子供達への防災教室を実施している。災害時の避難方法や被害を回避する知恵などを学ぶ事ができる、国土交通省作成の「防災カードゲーム」遊び。マイタイムライン作成や、土砂災害では、砂防ダムの模型を作製し町並みが破壊される様子を再現する。幼少期からの防災教育が未来の安心安全な地域社会づくりに必ず役立つ！「自分の命は自分で守る。命が助かった人だけが他人の命を助ける事が出来る」運命共同体の隣人同士が互いに協働して、大切な命や財産を守る事が必要だと思う。有事の際は勇気を出して、向こう三軒両隣へ、命を守る一声を掛けて欲しいと切に願う。



▲東日本大震災時、内郷コミュニティセンターで炊き出し



▲防災教室土砂災害模型を使った防災教室



双葉中学校長  
大沼 俊之さん

## 「はばたこういわきから 日本へ 世界へ 未来へ」

東日本大震災から10年が経ちました。当時、私は久之浜中学校に勤務しておりました。あの日を境にそれまでの生活が一変し、教育活動も中央台北中学校の校舎を間借りしてのスタート。市内各所からスクールバスで通学してくる生徒たち。大人も子どもも大きな不安を抱えていた毎日でした。

その年の夏、本格的にスタートした「いわき生徒会長サミット事業」も今年度で10年目を迎えました。スローガンは「はばたこういわきから 日本へ 世界へ 未来へ」。「ふるさとの未来を担う人材となるための企画力や問題解決力、実践力を身に付け、地域の復興に貢献する」ことが本事業の目的です。これまで関係団体や企業等から多くの支援をいただきながら、子どもたちは様々なプログラムに取り組み、生きる力をはぐくみ、課題を解決し、新たな道を切り開くことのできる人材の育成を続けています。

本事業のプログラムの一つである「いわき志塾」では、各業界の第一線で活躍するプロフェッショナルを講師として招き、対話を通して、講師の哲学や人間力、生き方に触れるとともに、そこから得た学びを参加者同士でまとめてプレゼンテーションするというワークショップを実施しています。学校も学年も考え方も異なる生徒同士がグループを作りますが、対話によるコミュニケーションを通して、それらのギャップを乗り越えて協力し、どのグループも発信の仕方を工夫し、積極的に取り組んでいます。

本事業のプログラムの一つである「いわき志塾」では、各業界の第一線で活躍するプロフェッショナルを講師として招き、対話を通して、講師の哲学や人間力、生き方に触れるとともに、そこから得た学びを参加者同士でまとめてプレゼンテーションするというワークショップを実施しています。学校も学年も考え方も異なる生徒同士がグループを作りますが、対話によるコミュニケーションを通して、それらのギャップを乗り越えて協力し、どのグループも発信の仕方を工夫し、積極的に取り組んでいます。

中学生の時に震災を経験し、過去に本事業で活動した子どもたちも、社会に出て活躍する年齢になりました。今年度の「いわき志塾」では、ふるさといわきで就職した「サミットシニア（OB・OG）」が講師を務めました。震災当時の経験やサミット事業での学び、そしてふるさといわきに対する想い、これからの夢や目標などを中学生に伝えてくれました。時間をかけて未来を担う人材の種を蒔いてきた結果、その成果が少しずつ芽吹き始めていると感じます。これからも学校だけではなく、地域や民間のお力を借りながら、次代のいわきを担う人材育成に向けての魅力ある場を提供できればと思います。

中学生の時に震災を経験し、過去に本事業で活動した子どもたちも、社会に出て活躍する年齢になりました。今年度の「いわき志塾」では、ふるさといわきで就職した「サミットシニア（OB・OG）」が講師を務めました。震災当時の経験やサミット事業での学び、そしてふるさといわきに対する想い、これからの夢や目標などを中学生に伝えてくれました。時間をかけて未来を担う人材の種を蒔いてきた結果、その成果が少しずつ芽吹き始めていると感じます。これからも学校だけではなく、地域や民間のお力を借りながら、次代のいわきを担う人材育成に向けての魅力ある場を提供できればと思います。



▲サミットシニアが講師を務めたいわき志塾



▲いわき志塾の講師・参加者全員での集合写真



いわき市教育委員会学校教育課  
有働 幸江さん

## 命をつなぐ行動のために

東日本大震災から10年が過ぎました。

私にとって忘れられない大震災の記憶は、津波によって大きく変わってしまった、当時住んでいた沼ノ内地区の姿、そして子どもの頃から見慣れた同じ学区の薄磯地区、豊間地区の光景です。

地震発生時、豊間小学校の子どもたちは、集団下校で学校を出た後でした。情報がない中で、その時子どもたちに避難を促したのは、当時の保護者の方々、そしてプールが波立つ様子を見て津波を予想した当時の校長先生の判断でした。校長先生の指示のもと、先生方は手分けして集団下校の班に駆けつけ、避難誘導に当たりました。子どもたちは高台や学校に避難し、その15分後には、歩いていた通学路は津波にのまれ、無くなってしま

いました。今も鮮明に残る震災の記憶の一つであり、非常時の判断と行動がいかに大切であるかを思い知らされた出来事でした。

あの日から10年がたった今、私たちが大震災によって得た経験と教訓を継承していくことが重要であると、改めて実感しています。

現在、小・中学校では、震災の教訓を生かし、各学校の実態に合わせて、地震・津波、土砂災害等を想定した避難訓練を実施しています。社会科や理科、道徳科などの教科においても、子どもたちの発達の段階に応じて、正しい知識を身につけることができるよう、防災・減災に関する学習に取り組んでいます。毎年、3月11日に向けて、東日本大震災を振り返る集会や校内放送、震災の記録などを含む防災教育資料を用いた授業なども行われています。

社会教育の場でも、日本赤十字社や消防団などの外部の機関の協力を得て、救急救命法講習、炊き出し体験など、体験的に防災を学ぶ取り組みが行われています。

今後も、防災教育資料やいわき震災伝承みらい館等の活用を図るなどし、大震災の経験と教訓を継承するとともに、子どもたちが正しい知識を習得できるようにし、家庭や地域と連携しながら、継続的に防災・減災教育に取り組んでいくことが、自ら命を守る行動につなげるために重要であると考えています。



▲地域の地図を活用した防災についての授業の様子（錦小学校4年社会科）



▲救急救命のための体験学習の様子（いわき防災サマーキャンプ）



J A福島さくらいわき地区本部  
本部長理事

### 根本 一雄さん

## 大震災が無ければ

東日本大震災から十年を迎えた今、あの時から今まで何をして来たのか、記憶をたどってみました。

午後の打ち合わせが終わり自分の机で新年度の事業計画の数字の確認をしていたと思います。突然、大きな地鳴りとともに後ろのガラス窓が音を立てて揺れだしました。「外に出ろ」との指示で飛び出しましたが、駐車場の地面が波打って揺れていました。津波、原発事故と続きニュースで各地の被害が知らされる中でこれから、どうなるのか心配でなりませんでした。

当時は、金融部長をしていたので、避難する組合員や家族の方のために貯金の便宜払いの処理を指示するなど、毎日が忙しかったことを思い出します。また、各支店長や支店の若い職員などが、避難したいと申し出ているとの報告を受け、ATMに出来るだけの現金を装填して避難するようにと上司の許可を得て行いました。

今、思い出すとしっかりとした情報が大切であり、必要だと思います。

地震の被害も大きかったのですが、農業には原発事故後の放射能被害に悩まされ続けています。

私は、家で農業を生業としてしています。和牛繁殖牛を飼っていますが、福島の牛肉から放射能が検出されてからは、子牛の価格下落となり、通常の価格の三分の一の価格で取引され、涙の出る思いでした。それからは、県・市の指導の下、安全・安心な農畜産物を生産するため、モニタリングや米の全量全袋検査など、県内農家の放射能との闘いが始まりました。

震災後、十年が過ぎる今、消費者に届く農畜産物は、安全を確認しています。

風評被害を少しでも小さくするため、県外でのイベントの実施等を行ってきましたが、道半ばであります。もし、あの地震がなければ、我々の組織は、合併などせずにJAいわき市のままであったと思います。残念でなりません。

今後、50年後、東日本大震災や、原発事故が語り継がれる中で、新しいエネルギー革命の起爆剤となることを期待します。

また、我々の「故郷いわきの地」が毎年豊穡の稔りを迎えることを願っています。



特定非営利活動法人みどりの杜福  
社会いわきワイナリー 理事長

**今野 隆さん**

## 障がい者と健常者が共生し地域の 活性化と文化の発展を目指して

その日は神谷作農園で畑仕事を終え、皆でワゴン車で帰る途中でした。地面がぐらぐらと揺れ、電柱も揺れているではありませんか。南白土の作業所もかなり揺れ、もう終わるかなと思ったらまた揺れるという、これまで経験したことがないような地震でした。その後、福島第一原発では3月12日、1号機が水素爆発し、3月14日3号機も爆発、3月15日4号機爆発と、まるで映画を見ているようで、現実感はなく、しかしこの世の終わりかと思まざるほどの緊迫感がありました。

平成21年8月、特定非営利活動法人みどりの杜福社会を設立し、平成22年4月1日就労継続支援B型事業所「就労支援センター未来工房」がオープン。田代農園で初めてワイン用ぶどうの植樹を行いました。そして1年がたち年が明けて、農園が再び緑を帯び始めた頃、平成23年3月11日東日本大震災が起きました。

放射能汚染の問題により、利用者は外に出るのを嫌がり、県内産の農作物への影響が懸念されるようになり、農業を柱にやがてはワイン製造で事業所経営をと考えていたスタッフはこれからどうしたものかと真剣に考える様になりました。

そこで室内でできることは何かと考え、3月末にはネットで探して水戸の社会福祉法人へ見学に行き、弁当事業をやることになり、1ヶ月の研修期間の後「宅配弁当未来キッチン」を立ち上げました。メンバーの約半数がキッチンでの作業を行うこととなり、慣れない仕事に悪戦苦闘しながら毎日がんばって作業を行いました。

そんな中、農業も継続し、収穫物はスクリーニング検査を受けたのち加工品として製造販売するようになりました。ぶどうの手入れも怠りなく行い、素晴らしいぶどうができるようになりました。

平成25年秋に収穫したぶどうを山梨県のワイナリーに協力していただき、平成26年2月、初めてのオリジナルワインが完成しました。同月、新たに就労支援センター未来ファームを立ち上げました。

平成27年2月、2つめのオリジナルワインが完成し、3月、「いわきワイナリー」の名称で、果実酒製造免許を取得しました。好間地区を拠点とし、本格的なワイン造りを行うことになりました。平成30年7月、いわき市及び地域の皆様の支援を受け、いわきワイナリーガーデンテラス&ショップをオープンしました。障がい者と健常者の共生の場として、地域の活性化と文化の発展の一助となる場として、これからも地域のために役立てていきたいと思ひます。



ファーム白石  
白石 長利さん

## 10年前のあの日から

2011年3月11日は、何故か朝から落ち着いて行動できなかった。それは、長女が病院から退院する日であったから。3月4日に、待望の女の子が生まれ、我が家に来る日でもあった。午前中には全ての手続きを終わらせ、実家で、祖父、父、母、自分、嫁と、長女で楽しいひとときを過ごしていた時に、それは起きた。

今まで経験したことのない地響きとともに、立ってられないぐらいの揺れが。とりあえず、家族全員無事だったのが救いであった。

この時はまだ、福島第一原子力発電所の存在などは、1ミリも考えていなかったのが正直なところである。

そして、翌日に水素爆発が起き、地震・津波・原発事故という3つの事が福島県を襲うことになる。

幸い、自分の住む小川町は地震や津波の影響はそこまで大きな被害は無かったが、自分は農業ということもあり、原発事故の影響による放射能汚染というものが重くのしかかることになる。

当時は、放射能を測定する機器などは身近になかったのも事実であり、出荷停止を余儀なくされた。しかし、食べる人の安全が第一であり、自分たち生産者の安全も第一だと思うので、当時の対策は万全であったと思う。そして、時間の経過とともに、風評被害の実態も現れてきた。いわき市は、行政と自分たち農家がタッグを組み、いち早く風評被害対策行動を起こした。安心安全です！というよりも、リアルな今の農業の現状や、<sup>おい</sup>美味しさや楽しさを伝えていくというところに重点を置いた。結果、市内外のたくさんの人に、応援や支援の輪が広がった。当時の農業振興課・農政課が中心となり、そこに自分たちいわき農家もしっかりと参画し、ウェブサイトや、イベントなどを開催しこの10年いろいろな事をしてきた。近年はコロナの影響などで、なかなか思うような取り組みはできていないが、新たな取り組みも生まれた。オンライン化が進み、現地との距離を縮めることなどを通して、生産者と消費者のやり取りをするなど、新たな人との<sup>つな</sup>繋がりができていく。

震災から10年。10年の間にはまた違った災害や問題などが起きている。しかし、震災が起こったことで、強化してきた人との繋がりがあれば、なんでもできると自分は思った。だからこそ、今までの繋がりが、そして今後の繋がりを大事にして生きていく。それだけだと。自分は農家という立場を活かし、いわきで安心安全はもちろんのこと、うまい野菜で、人と人とを、これからも繋げていきたい。



▲みんなが集まる畑



いわき商工会議所 会頭  
小野 栄重さん

## 「世界に誇れる復興モデル都市」の 実現に向け駆け抜けた10年

東日本大震災から10年の節目を迎えました。がれきの山と化した沿岸部、陥没した道路や崩れ落ちた岸壁、道路に横たわる船舶、背を向けてひっくり返った自動車の数々。1か月に亘る断水、食料不足、ガソリンスタンドに並ぶ長蛇の車列。高台から平の中心市街地を見下ろした時、いつもは煌びやかな街の灯が嘘のように真っ暗になった光景を今でも思い出します。

東日本大震災により、私たちはかけがえのない大切なものをたくさんなくしましたが、夢や希望、ふるさとを再起するという熱い気持ちを失うことはありませんでした。

改めて、これまでの取り組みを振り返りますと、震災直後の復旧期においては、事業所の存続を最優先課題と捉え、大手企業への撤退防止要請、大規模なグループ補助金の斡旋<sup>あつせん</sup>、繰り返し行った政府への要望活動、安心安全を裏付けるモニタリングプロジェクトの実施など、非常事態にあたり一日も早い地域経済の安定化に向けて全力を注ぎました。

続く復興期においては「地域復興ビジョン2014」を策定し、①学術研究機関が集積した知の拠点都市、②廃炉・エネルギー等の新産業拠点都市、③暮らしやすい生活拠点都市を目指すべきいわきの姿と捉え、中小企業の経営支援強化はもとより、総合エネルギー産業都市構想の推進、政府・研究機関の誘致活動、風評に負けないブランドづくりなど、力強い地域経済の復興に取り組みました。私にとりましては、「世界に誇れる復興モデル都市・いわき」を目標に掲げ、まさに駆け抜けた10年でありました。

現在、いわき地域経済が抱える最大の課題は、コロナ禍を生き抜き、早期復興を図るための緊急対応とビジネスチェンジです。こうしたことから、昨年策定致しました「ウィズコロナ時代における地域経済復興プラン～集え！ 勇気ある挑戦者たち～」を踏まえ、「中小・小規模事業者の持続とチャレンジ支援」を最重点事業に掲げ、行政との協調体制のもと、全力集中で取り組んで参ります。

一方、中長期的な課題として、地域活力の源泉となる関係・定住人口の増加、将来の地域を支える人財の育成、カーボンニュートラル社会を先導する次世代エネルギー産業の定着、ワクワク感のあるまちづくり等が挙げられます。こうした地域課題の解決に向けて、東京圏から地方への流れを生かし、企業と人財の「いわきシフトの推進」を図って参ります。

まだまだ困難な道のりは続きますが、明るい未来の実現に向けて、行政および全国各地商工会議所との連携をより一層深めながら取り組んで参りたいと考えておりますので、ご支援ご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます。



▲市内企業のためにさまざまな支援や事業を実施



公益社団法人いわき青年会議所  
前理事長

**斉藤 和治さん**

## 震災を忘れない

東日本大震災から早いもので10年という月日が流れました。10年前の3月11日。

あの日に体験した激しい揺れや、私たちの住む街を一瞬にして変えてしまったほどの津波の様相、言葉では言い表すことのできない絶望感、深い悲しみなど、負の感情を抱いたことを昨日のこのように覚えています。

そのような状況下で、私が所属しているいわき青年会議所では、当時、自分たちの活動の全てを中止し、全国の仲間たちからお寄せいただいた支援物資を、避難所や、物資を必要とされている方々への配給、被災した方々の自立支援を行いました。差し迫る時間の中、私たちは行動へと移すことへの迷いはありませんでした。行政の力だけではフォローしきれない細かな支援を、自分たち、青年が担わなければならないという責任感から、会員が同じ目的を通して一致団結し活動を行いました。

様々な活動を通して、私は多くの方々とふれ合う機会を得ることができました。

そのような中、あるご婦人との出会いによって、大きく価値観を変えるほどの出来事が起こることとなります。

その方はご家族を津波によって亡くされ、今まで長年住んできた自宅を失い、その辛い心境でありながらも、私と顔を合わせるたびに「今日もありがとう」と言ってくださいました。なにより、作業の最終日、休憩をしている私の横へご婦人は歩み寄ると、親身になってお話をされたことが、10年経った今でも私の原動力となっています。それは、「私たちはご先祖様に大きな地震がきたら直ぐに逃げろと教わった。でも、それを若い人に正しく伝えることが出来なかった。その後悔の念が強くあるけれど、あなたは若い人だから、これから先、悲しい想いをする人が1人でもいなくなるように、経験したことをもっと若い人に伝えてね。」その言葉が、私にとっては、未来へ託す道しるべのように聞こえ、強く印象に残っています。

あれから10年という月日が流れ、今では落ち着いた日常生活を取り戻しているようにも見えますが、現実的に東日本大震災を風化させるにも十分な時間となってしまいました。近年起きた台風災害や時折くる地震などもあり、その時々で東日本大震災を思い起こす事はあっても、日頃の災害に対する意識の低下を肌で感じる時があります。今を生きるということは、あの時生かされた命とも言えます。今の時代を預かる私たちは、未来を生きる子供たちに悲しい想いだけを残すのではなく、一人ひとりの体験を未来に繋げ、人の想いや願いを未来への希望に変えていくために、全ての人の想いを形に残していくことが今、必要なのではないでしょうか。



株式会社マルト  
代表取締役社長  
**安島 浩司**さん

## 食を通して地域の 「ライフラインを守る」ことが使命

2011年3月11日 東日本大震災発生。これまでの地震であれば各店舗に電話で被害状況を確認するところですが、今回は桁違いの被害に連絡方法がほとんどない状態。各店舗に対処を任せるしかありません。地震後の津波でも店舗への被害は出ませんでした。従業員の家や家族には大きな被害が出ました。この日は、スーパーの店長の3分の1が公休をとっていました。各店でベテランの従業員を中心とした現場の判断で、半分の店舗が入口付近を整理して夕方には店を再開しました。但し、販売可能な商品は限定され多くのお客様が並ばれました。停電の影響でレジが使えない店舗は電卓を使って計算しながら販売をしました。

12日になって、少しずつ各店舗の情報が本部に入ってきました。その多くは社内のWebシステムによるメールで店長とのやり取りを行いました。電話は固定電話も携帯電話も公衆電話も使えません。その為、直接各店舗まで行って状況の確認をすることにしました。遠くは片道60km以上の所もあります。いわき市内は、マルト24店舗全店営業をしました。お客様が早朝から並ばれているので、ほとんどの店が開店時間を早めて営業開始。13日以降の全店営業を店頭駐車場で継続しました。当社以外にも大手スーパー等がありますが、営業しているのはマルトのみでお客様が連日長蛇の列、朝早くからキッチンと並ばれていました。一部の店でトラブルがあり警察に巡回もお願いしました。

その後も全店営業を予定していましたが、12日と14日の福島第一原子力発電所の爆発事故で、①従業員の避難者が出てきた、②問屋、メーカーから商品が届かない、③ガソリンの供給がなくなり従業員が出勤できない、等々の原因で全店営業が不可能になり、各地区の大型5店舗に人と商品を集中させて店を開け続けました。

震災発生から10日後の3月21日は従業員を休ませる意味でいわき地区店舗全店休業しました。そして22日から5店舗の営業再開、さらに24日頃からは、少しずつ営業を再開する店が増えてきて、4月1日からは改装中だった店以外すべてが営業をはじめました。

東日本大震災を通して地域密着型のスーパーマーケットの使命は、「地域のライフラインを守る事」であり、その責任の大きさとやりがいを従業員の皆さんと共に再確認しました。



▲震災翌日からの駐車場での販売



▲抜け落ちた店舗の天井



▲早朝からの長蛇の列